

二〇二六年度 早稲田大学大学院文学研究科 入学試験問題
 【修士課程】 専門科目 日本語日本文学コース ※解答は別紙（縦書）

注意事項

- 1 問題冊子および解答用紙は、試験開始の合図があるまで開かないこと。
- 2 受験番号と氏名は、解答用紙1ページの所定の欄に記入すること。
- 3 問題はこのページを含めて1～7ページである。
問題一は、共通問題である。解答用紙の最初に、入学後に専攻する専門分野の選択肢が掲出するので、該当するものを○で囲むこと。
問題二は、共通問題である。三つの問いに解答していない場合、問題二全体の得点はゼロとなる。
問題三は、選択問題である。日本語学、古典文学、近現代文学の三領域の中から、入学後に専攻する領域の問題を選択し、設問の指示に従って解答すること。
- Ⅰ 日本語学領域 2ページ
 Ⅱ 古典文学領域 3～4ページ
 Ⅲ 近現代文学領域 5～7ページ

4 解答用紙は四枚表裏。1～8ページである。問題との対応は次の通り。

	<u>問題一</u>	1ページ
	<u>問題二</u>	1～2ページ
	<u>問題三</u>	3～4ページ
		3～4ページ
		5～8ページ

* 解答はすべて解答用紙の所定のページに記入すること。
 * 設問の指示に従い、問いの番号や選択した記号を適宜明記すること。

問題一 〔共通問題〕

大学院修士課程においてあなたが研究しようとしているテーマや対象について、自らの構想している研究方法に触れながら、十行程度で、できるだけ具体的かつ簡潔に説明せよ。

問題二 〔共通問題〕

- ・次のABC群各々三問の中から、それぞれ一問ずつを選択し、各問十行程度で解答せよ。
- ・一般外国語で「日本語」を受験する者は、ABCのいずれか一つの群の代わりとしてG群の間を選択できる。
- ・解答の冒頭には、それぞれ選択した問の記号(A1など)を明記せよ。
- ・三つの群の問題の中、一つの群の問題でも無回答の場合、問題二全体の得点は零となる。

【A群】 日本語学領域

- A1 「ら」抜き言葉、「さ」入れ言葉など、最近言及されることが多い「言葉の乱れ」について自分の考えを述べよ。
- A2 母音の音声を決定する口や舌の構えにはどんな特徴があるか説明せよ。
- A3 日本語における外来語の表記についてどのようなことが問題となり得るか、具体例を挙げて説明せよ。

【B群】 古典文学領域

- B1 日本古典文学における「韻文」と「散文」との関係性について、具体例を挙げて述べよ。
- B2 日本古典文学とナショナリズムについて、具体例を挙げて述べよ。
- B3 日本古典文学研究におけるデータベースの活用について、具体例を挙げて述べよ。

【C群】 近現代文学領域

- C1 近現代文学において階級(社会階層)はどのように描かれ、どのように問題化されてきたか、具体的な例を挙げて論評せよ。
- C2 近現代文学における総合芸術的な指向について、具体的な例を挙げて論評せよ。
- C3 近現代文学の表現史について、「語り(ナラティブ)」「翻訳」「比喩」のキーワードのうち少なくとも二つを用い、具体的な例を挙げて論評せよ。

2/7

- 【G群】 一般外国語で「日本語」を受験する者のみ、右のABC群の中の一つの群の代わりとして選択できる問題。
- G1 あなたの研究する「日本語学」または「日本文学」という学問分野について、代表的な論文・研究書または研究者名を具体的に挙げて説明せよ。

問題三 〔選択問題〕 I II IIIから一つの領域を選択し解答せよ。

I 日本語学領域

- 1 各自の関心がある研究領域において、資料(データ)を取り扱う上で留意すべきことがらを具体的に述べよ。
- 2 次のA～Fから三題を選び、解答せよ。解答の冒頭にその記号を明記すること。
- A 言語と認知の関係について、具体例を挙げて、考えるところを述べよ。
- B 橋本文法について述べよ。
- C 複合動詞のアクセントについて知るところを述べよ。
- D 五十音図の配列構造と歴史、および各項に対応する音声について説明せよ。
- E あて字の種類について、具体例を挙げて説明せよ。
- F 現代日本語において、同じ発音の語でも異なる送り仮名を持つものがある。「押さえる」「押える」「組み」「組」に両表記があることについて、それぞれ説明せよ。

【修士課程】

専門科目

日本語日本文学コース

※解答は別紙(縦書)

II 古典文学領域

(一) 次に掲げる語群いづつの中から二つを選び、それぞれについて要領よく説明をせよ(一題につき五行程度)。解答の冒頭には、選んだ記号とその語とを明記すること。

い	大伴旅人	ろ	防人歌	は	根の堅州国	に	水江浦島子
ほ	「夕霧」巻	へ	菅原孝標女	と	物語歌合	ち	紫明抄
り	小野小町	ぬ	堀河百首	る	建礼門院右京大夫集	を	三条西実隆
わ	唐物語	か	東関紀行	よ	義経記	た	丹緑本
れ	洒落本	そ	山東京伝	つ	大槻磐溪	ね	古文辞学
な	藤原公任	ら	本朝文粹	む	太平広記	う	日本国見在書目録

(二) 次のA～Iの中から一題を選び、論述せよ(二十行程度)。

- A 『万葉集』の「相聞」
- B 『古事記』中巻
- C 和歌における「述懐」
- D 「百人一首」の成立と展開
- E 『枕草子』の本文系統
- F 中世散文作品と歴史資料の関係について
- G 浮世床
- H 大窪詩佛
- I 日本古典文学と儒教

(三) 次のア～キの中から一つ選び、本文の直後の(一)内の指示に従って解答せよ。

ア

金野乃美草荊葺屋村礼里之兎道乃宮子能借五百磯所念

(右をすべて平仮名で書き下し、現代語訳せよ。)

イ

所謂久延毘古者於今者山田之曾富騰者也

(右をすべて平仮名で書き下し、現代語訳せよ。)

ウ

あゝいあゝなまは、いもろよのるに
はるれいしよもいさけい

(右の影印の全文を翻字し、現代語訳せよ。)

エ

いまたりて、さるるに
さるるさるるのさるる
さるるさるるさるる

(右の影印を翻字し、濁点を付し、現代語訳せよ。)

早稲田大学図書館蔵

オ

さるるさるる
さるるさるる
さるるさるる

(右の影印を翻字するとともに、傍線部の人物名を答えよ。)

カ

一、夕、歌、川、豊、國、乃、中、を、
三、笑、亭、可、樂、落、落、
く、能、多、く、人、物、道、
と、遂、に、傍、書、輝、あ、く、

吾、中、を、あ、く、感、
落、落、多、く、人、物、
此、後、の、信、を、あ、く、
花、街、の、更、に、あ、く、
則、ち、あ、く、あ、く、
ま、ん、男、湯、の、都、と、あ、く、

(右の草書で書かれた版本の序文を、適宜句読点を添えて、ルビも含めて全文翻字し、その後に現代語訳せよ。)

キ

管、被、打、管、根、類、夏

管、根、無、止、者、也、雖、然、殿、上、廣、申、夜、天、神、類、被、打、也

云

(右の影印を全文翻字し、現代語訳せよ。)

III 近現代文学領域

(一) 次のA1、2、B1、2は、日本の近現代文学の代表的な作品の一節である。これら四つについて、①用語・文体・語りの方法など表現上の特色、②その作品の文学性や文学史的意味・文学者の生涯における位置、の両面から、自由に論ぜよ。

A1 尾崎紅葉「金色夜叉」

A2 佐藤春夫「田園の憂鬱」

前編

第一章

未だ宵ながら松立てる門は、一様に鎖籠めて、眞直に長く東より西に横はれる大道は掃きたるやうに物の影を留めず、いと寂くも往來の絶えたるに、例ならず繁き車輪の軋は、或は忙かりし、或は飲過ぎし年貢の歸來なるべく、疎に寄する獅子太鼓の遠響は、はや今日に盡きぬる三箇日を惜むが如く、其の哀切に小き隙は断れぬべし。
元日快晴、一日快晴、三日快晴と語られたる日記を讀して、此黄昏より厭は戦出でぬ。今は「風吹くな、なあ吹くな」と優き聲の有むる者無きより、憤をも増したるやうに飾竹を吹靡けつゝ、乾びたる葉を粗なげに鳴して、吼えては走り、狂ひては引返し、探みに探んで獨り散々に騒げり。微曇りし空は之が爲に眠を覺されたる氣色にて、銀梨子地の如く無数の星を顯して、鋭く返えたる光は寒氣を發つかと想はしむるまでに、其の薄明に曝さるゝ夜の街は殆ど水らんとすなり。

人此裏に立ちて寥々冥々たる四望の間に、争か那の世間あり、社會あり、都あり、町あることを想得べき。九重の天、八咫の地、始めて混沌の境を出でたりと雖も、萬物未だ盡く化生せず、風は試に吹き、星は新に輝ける一大荒原の、何等の旨意も、秩序も、趣味も無くて、唯濫に過ぐ横はれるに過ぎざる哉。旧の中は宛然沸くが如く樂み、謳ひ、酔ひ、戯れ、歡び、笑ひ、語り、興ぜし人々よ、彼等は儚くも夏果てし子子の形を歎めて、今將何處に如何にして在るかを察はざらんとするも難からずや。多時靜なりし後、遂に拍子木の音は聞えぬ。其響の消ゆる頃忽ち一點の燈火は見え初めしが、搖々と町の盡頭を横截りて失せぬ。再び寒き風は寂き星月夜を壇に吹くのみなりけり。唯有る小路の湯屋は仕舞を急ぎて、廂間の下水口より噴出づる湯氣は一團の白き雲を舞立てゝ、心地悪き微温の四方に溢るゝと興に、垢臭き惡氣の盛に迷るに遭へる綱引の車あり。勢ひて角より曲り來にければ、避くべき邊無くて其中を駈抜けたり。

「うむ、臭い。」

車の上に登して行過ぎし跡には、葉卷の吸殻の捨てたるが赤く見えて煙れり。

「もう湯は抜けるのかな。」

「へい、松の内は早仕舞でございます。」

車夫の倦く答へし後は語絶えて、車は真直に走れり。紳士は二重外套の袖を袖と掻合せて、額の前皮の内に耳より深く面を埋めたり。灰色の毛皮の敷物の端を車の後に垂れて、横縞の華麗なる浮波織の蔽膝して、提灯の微草はTの花文字を二個組合せたるなり。行き／＼て車は此小路の盡頭を北に折れ、稍廣き街に出でしを、僅に走りて又西に入り、其の南側の半程に繁輪と記したる軒燈を掲げて、刻竹を飾れる門構の内に挽入れたり。玄關の障子に燈影の映しながら、格子は鎖固めたるを、車夫は打叩き

て、

「頼む、頼む。」

奥の方なる響動の劇きに紛れて、取合はんとせざりければ、二人の車夫は聲を合せて訪ひつゝ、格子戸を連打にすれば、旋て急足の音立てゝ人は出で來ぬ。

I dwelt alone
In a world of moan,
And my soul was a stagnant tide.

Edgar Allan Poe,

私は、呻吟の世界で
ひとりて住んで居た。
私の靈は静み腐れた潮であつた。

ニドガア フラン ポオ

その家が、今、彼の目の前へ現れて來た。

初めのうちは、大變な元氣で砂ぼこりを上げながら、主人の後になり前になりして、飛びまはり廻はりついて居た彼の二足の犬が、やうやう柔順になつて、彼のうしろに、二足並んで、そろそろ隨いて來るやうになつた頃である。高い木立の下を、路がぐつと大きく曲つた時に、

「ああやつと來ましたよ」

と言ひながら、彼等の案内者である諸毛の太つちよの女が、片手で日にやけた額から滴り落ちる汗を、汚れた手拭で拭ひながら、別の片手では、彼等の行く手の方を指し示した。男のやうに太いその指の尖を傳うて、彼等の瞳の落ちたところには、黒つばい深緑のなかに埋もれて、目眩しいそれはそれはした夏の朝の光のなかで、鈍色にとつしりや或る落着きをもつて光つて居るささやかな菅葺の屋根があつた。

それが彼のこの家を見た最初の機會であつた。彼と彼の妻とは、その時、各この草屋根の上にさまようて居た彼等の瞳を、互に相手のその上に向けて、瞳と瞳とで會話をした――

「いい家のやうな豫覺がある」

「ええ私もさう思ふの」

その草屋根を見つめながら歩いた。この家ならば、何日か遠い以前にでも、夢にであるか、幻にであるか、それとも疾走する汽車の窓からでもあつたか、何かで一度見たことがあるやうにも彼は思った。その草屋根を焦點としての視野は、實際、何處でも見出されさうな、平凡な田舎の横顔であつた。而も、それが却つて今の彼の心をひきつけた。今の彼の體れがそんなところにあつたからである。さうして、彼がこの地方を自分の住家に擇んだのも、亦この理由からに外ならなかつた。

廣い武蔵野が既にその南端になつて盡きるところ、それが漸くに山國の地勢に入らうとする變化――言はば山國からの微かな餘情を湛へたニビロオグであり、やがて大きな野原への波打つプロオグでもあるこれ等の小さな丘は、目のとどくかぎり、此處にも起伏して、それが形造るつまらぬ風景の間を縫うて、一筋の平坦な街道が東から西へ、また別の街道が北から南へ通じて居るあたりに、その道に沿うて一つの草深い農村があり、幾つかの卑下つた草屋根があつた。それはTとYとHとの大きな都市をすぐ六七里の隣にして、譬へば三つの劇しい旋風の境目に出來た眞空のやうに、世紀からは置きつ放しにされ、世界からは忘れられ、文明からは押流されて、しよんぱりと置かれて居るのであつた。

B1 井伏鱒二「山椒魚」

山椒魚は悲しんだ。

彼は彼の棲家である岩屋から外に出てみようとしたのであるが、頭が出口につかへて外に出ることができなかったのである。今は最早、彼にとっては永遠の棲家である岩屋は、出入口のところがそんなに狭かった。そして、ほの暗かった。強ひて出て行かうところみると、彼の頭は出入口を塞ぐコロッツの途となるにすぎなくて、それはまる二年の間に彼の體が發育した證據にこそはなつたが、彼を狼狽させ且つ悲しむには十分であつたのだ。

「何たる失策であることか！」

彼は岩屋のなかを許されるかぎり深く泳ぎまはつてみようとした。人々は思ひぞ屈した場合、部屋のかなかを覗くこんな具合に歩きまはるものである。けれど山椒魚の棲家は、泳ぎまはるべくあまりに廣くならつた。彼は體を前後左右に動かすことができたわけである。その結果、岩屋の壁は水あかにまみれて滑かに感觸されたので、彼は彼自身の背中や尻尾や腹に、つひに舌が生えてしまつたと信じた。彼は深い嘆息をもらしたが、恰も一つの決心がついたかのごとく呟いた。

「いよいよ出られないといふならば、俺にも相當な考へがあるんだ」

しかし彼に何一つとしてうまい考へがある道理はなかつたのである。

岩屋の大井には、杉苔と鏡苔とが生えて、鏡苔は緑色の鱗でもつて地所より、(小兒の遊戯の一種)の形式で繁殖し、杉苔は最も細く且つ紅色の花柄の尖端に、可憐な花を咲かせた。可憐な花は可憐な實を結び、それは藍花植物の種子散布の法則通り、間もなく花粉を散らせはじめた。

山椒魚は、杉苔や鏡苔を眺めることを好まなかつた。寧ろそれ等を疎んじざへした。杉苔の花柄はしきりに岩屋のなかの水面に散つたので、彼は自分の住家の水が濁れてしまふと信じたからである。利へ岩や天井の壁みには、一群づゝの鏡苔も生えた。鏡は何と愚かな習性を持つてゐたことであらう。常に消えたり生えたりして、絶えず繁殖して行かうとする意志はないかのやうであつた。山椒魚は岩屋の出入口に顔をくつつけて、岩屋の外光景を眺めることを好んだのである。ほの暗い地所から明るい地所をのぞき見することは、これは興味深いことではないか。そして小さな窓からのぞき見るほど、常に多くの物を見ることはできないのである。

谷川といふものは、目茶々な急流となつて流れ去つたり、意外なところで大きな淀みをつくつてゐるものらしい。山椒魚は岩屋の出入口から、谷川の大きな淀みを眺めることができた。そこでは水底に生えた一葉の藻が朗かな發音を發して、一本づゝの細い莖でもつて水底から水面まで一直線に延びてゐた。そして水面に達すると突然その發音を中止して、水面から空中に藻の花をのぞかせてゐるのである。多くの目高藻は、藻の莖の間を泳ぎぬけることを好んだらしく、彼等は藻の林のなかに群をつくつて、互に流れに押し流されまいと努力した。そして彼等の一群は右によろめいたり左によろめいたりして、彼等のうちの或る一びきが誤つて左によろめくと、他の多くのものは他のものに後れまいとして一せいに左によろめいた。若し或る一びきが藻の莖に邪魔されて右によろめかなければならなかつたとすれば、他の多くの小魚達はことごとく、こゝを先途と右によろめいた。それ故、彼等のうちの或る一びきだけが、他の多くの仲間から自由に逃走して行くことは甚だ困難であるらしかつた。

山椒魚は、これ等の小魚達を眺めながら彼等を嘲笑してしまつた。

「なんといふ不自由な奴等であらう！」

淀みの水面は絶えず緩慢な渦を描いてゐた。それは水面に散つた一片の白い花葉によつて證明できるであらう。白い花葉は淀みの水面に廣く圓周を描きながら、その圓周を次第に小さくして行つた。そして速力をやめた。最後に、極めて小さな圓周を描いたが、その圓周の中心點に於て、花葉自身は水の中に消えてなくなつた。

山椒魚は今にも目がくらみさうだと呟いた。

或る夜、一びきの小魚が岩屋のなかへまぎれ込んだ。この小動物は今や産卵期のまつたよなかにあるらしく、透明な腹部一ぱいに恰も餘の穂草の種子に似た卵を抱へて、岩壁にすがりつた。さうして細長いその終りを見磨けることができないやうに消えてゐる觸手をふり動かしてゐたが、いかなる了見であるか彼は岩壁から跳びのき、二三回ほど巧みな宙返りをこゝろみて、今度は山椒魚の横つ腹にすがりつた。

山椒魚は小魚がそこで何をしてゐるのか、ふりむいて見てやりたい衝動を覺えたが、彼は我慢した。ほんの少しでも彼が體を動かせば、この小動物は驚いて逃げ去つてしまつたであらう。

「だが、このふもちの蟲けら同然のやつは、一たいこゝで何をしてゐるのだらう？」

この一びきの蟲は山椒魚の横腹を岩石だと思ひ込んで、そこに卵を産みつけてゐたのに相違ない。さもないならば、何か一生懸命に物思ひに耽つてゐたのであらう。山椒魚は得意げに言つた。

「くつたくしたり物思ひに耽つたりするやつは真逆だよ」

彼はどうしても岩屋の外に出なくてはならないと決心した。いつまでも考へ込んでゐるほど愚かなことではないではないか。今は冗談ごとの場合ではないのである。

B2 李良枝「由熙(ユヒ)」

由熙の電話を切つた時から、私は落ち着きを失くした。

机の上には処理しなければならぬ伝票や書類がたまつてゐた。しかし、仕事に全く身が入らなくなつてしまつた。

そのうちに、腕時計が四時をさした。

見上げると、会社の時計も同じ時刻をさしていた。

しばらくしてやり残してゐた仕事を始め、六時少し前にその日の仕事を終え

るとすぐ身仕度をした。六時ちょうどに会社を出た。

走り寄つてきた空車のタクシーを呼び止め、乗りこんだ。タクシーが家の方

向に向かつて走り出すと、思い出したやうにまた落ち着きを失くした。電話で

の由熙の声がまるで今話してゐるやうな鮮やかさで迫つてきた。タクシーが信

号の前で急ブレーキをかけるごとに、瞬いた臉の内側に由熙が現われ、走り出

すとともに遠のいた。

タクシーを使つて家に帰ることなど滅多にないことだつ

た。一分でも早く帰りたい。しかし、家までの道のり

は、いつもより長く、バスに乗つて帰る時よりも車が揺

れ、止まる信号の数も多く感じられた。

会社を出てくる時、社長と同僚に挨拶をしてきただらう

か、私はそんなことを考え始めた。ついさっきまでのこと

がよく思い出せない。時間からすれば数分前の、タクシー

に乗りこむまでの自分のことがはつきりとしなかつた。

寒かつた。風も強かつた。ソウルは春の日が短く、朝晩

はまだ冬のように日中との温度差が激しい。ブレーキの音

が前からもうしろからも聞こえ、からだがぐらつくたび

に、バックを抱え、背中を丸めた。

家の前でタクシーを降りた。

来た道の角の方に戻つていくタクシーを、私は降り立つ

た同じ場所に立ちつくしながら見つめた。ごくわずかに傾

斜しながら下がった坂道の左側の角の向こうに、タクシー

が消えていった。

家の前の道に人の姿はなく、道の角からも人や車が現わ

れ出てくる気配はなかつた。今し方消えたタクシーの轟音

もすでに聞こえなくなつた。

記憶の中の由熙の声が、私の背中を突つた。声そのも

のにしみこんでゐる視線の動きも立ち現われた。声と、そ

の視線に誘われ、私は振り返つた。由熙が横に立つてい

た。坂道の上方を見上げてゐるその横顔がはつきりと思ひ

出された。六ヵ月前のある日と同じやうに、私は由熙と並

んで立ち、うしろにある岩山の連なりを見上げた。

坂道は右にくねり、道に沿つて続く人家が見上げる私の

視界の下方で静まり返つてゐた。その上方に、岩山がそそ

り立つてゐた。丸みを帯び、ところどころ鋭く突き立ち、

灌木を岩の間に繁らせてゐる岩山の稜線は、下方の人家を

包みこむやうに、あるところではのしかかるやうにも続

き、一つ一つの岩肌を夕暮れの春の風の中に晒してゐた。

凜とした静けさは、星のない重たげな空全体に広がり、岩

山の周りの空の色は薄くぼつと輝いても見えた。

視線は、過去のある日と同じやうに一番高いところに位

置する岩の表面に引きつけられた。

——耳(ユヒ)

由熙の声を思い出し、その發音を真似るやうにして私は

呟いた。ウイの音を強調し、ことさら正確に發音しようと

してゐた由熙の、かえつてぎこちなく聞こえたその声が蘇

えた。

風は冷たく、険しきを感じるほど、刺々しく強かつた。

手を交差させ、両腕を抱いて慄えてゐる自分の姿も、六ヵ

月前の、冬に近づいてゐた日の自分を思い出させた。あの

日、この坂道の少し下で、厚手のカーディガンを羽織り、

その端を引っ張りながらカーディガンをからだに巻きつけ

るやうにして私は立つてゐた。風もやはり冷たく、刺々し

かつた。

(二) 次の中から四題を選び、論評せよ(選んだ番号を、指定欄に記すこと)。

- 1 日清戦後の文学状況を、具体的な事例をあげて論評せよ。
- 2 言論統制と近現代文学との関連について、具体的な作品をあげて論評せよ。
- 3 著作権と近現代文学とのかわりを、具体的な作品をあげて論評せよ。
- 4 貧困をテーマとする近現代文学について、具体的な事例をあげて論評せよ。
- 5 東西冷戦と近現代文学との関連について、具体的な事例をあげて論評せよ。
- 6 高度経済成長期の文学の特色を、複数の作家と作品に言及しながら論評せよ。
- 7 近現代文学におけるフェミニズム批評の可能性について論評せよ。
- 8 近現代文学と音楽とのかわりを、具体的な事例をあげて論評せよ。
- 9 近現代文学研究と文学賞との関連について、具体的な事例をあげて論評せよ。
- 10 近現代文学にかかわる近年の資料、または近年刊行された研究書のうち、あなたが重要と思うものを一つ(以上)とりあげ、なぜそう考えるか論評せよ。

受験番号	
氏名	カナ
	漢字

この欄以外に受験番号、氏名を記入しないこと。
漢字氏名がない場合は、ひらがなで記入すること。

日本語日本文学

総	点
---	---

———ここから記入すること———

問題一

入学後に専攻する専門領域を○で囲め。古典文学領域については、「」内の該当する時代等、
ならびに散文・韻文にも○を付すこと。
日本語学領域
古典文学領域 「上代・中古・中世・近世・和漢比較文学」／ 散文・韻文
近現代文学領域

問題二

解答の冒頭には、それぞれ選択した問の記号（例 A1）を明記すること。

（裏へ続く）

——これより先の余白には絶対に記入しないこと——

(次ページへ続く)

I 日本語学領域／II 古典文学領域

(選択した領域を○で囲め) ※問いの番号や選択した記号を適宜明記すること。

——これより先の余白には絶対に記入しないこと——

(次ページへ続く)

——ここから記入すること——

問題三 Ⅲ 近現代文学領域

(一) A 1

(二) A 2

--

(裏へ続く)

(一)
B
1

(一)
B
2

——これより先の余白には絶対に記入しないこと——

(次ページへ続く)

——ここから記入すること——

(二) ()

(二) ()

(1) ()

(1) ()

——これより先の余白には絶対に記入しないこと——